# 梅下村塾 ⑧⑧

塾長　梅内拓生

## 「森と水と命の惑星」国際会議

### ～地域と世界の心と魂を詠む～

（詠む・つなげる）

自分が生きている世界をどう捉えどのように生きて行くべきか、どの時代も人間はこれを考えて来ました。お釈迦様は人生を「苦」と捉え、この「苦」から自由になる方法を考えました。そして仏教が生まれました。

中国の荘子は「荘周夢に胡蝶と為る」をのべて「夢が現実か、現実が夢か、人生は何かは、わかったものでない」と述べている。織田信長は数千の味方で数万の敵である今川義元との桶狭間の戦いへ出陣の前に「人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。ひとたび生を得て滅せぬもののあるべきか」と敦盛の幸若舞を舞って、出陣を決行したと伝えられている。

宇宙、地球、世の中、自分の世界は、見方や、心の持ち方で変わって来るものである。「ことばつなぎ」と称する「詠む・つなげる」、これは詠んで、自分の世界、世の中、地球、そして宇宙とつなげることなのです。

「梅下村塾」は草の根の人々が詠んだ作品を広い世界とつなげております。今朝、宗教学者の山折哲雄氏と免疫学者の故多田富雄氏の対談「人間の行方」を読みました。２０００年４月の出版本で、東京大学医学部教授会で顔なじみの多田教授の本を購入して読んだのでした。鉛筆書きのメモが本の余白に沢山書いてありました。

今朝、この本を読みかえして、内容の捉え方が変わってきたことを感じました。山折哲雄教授とは十年以上も前に京都の宗教と文化の懇談会でご一緒したことがあり、お二人とも知己の間柄でした。「人間の行方」を読みながら、梅下村塾の原稿にどのように取り入れるかを考えました。

「ことばと遺伝子」、「ことばと脳」、「ことばと生命」、などを思いつきました。これらは、おいおい「梅下村塾」に掲載することを考えております。「人間の行方」には、現代科学と宗教、芸術、政治、経済、文化を現世代にどのようにつなげるかが話されておりまして。「梅下村塾」で述べている（詠む・つなげる）はまさに、「人間の行方」の問いに答えるものであると思います。

（理と情の問合いとディベート）

東日本大震災の地である気仙地方には長くて深い地域の歴史伝統がある。大震災復興への世界からの協力に感謝しつつ、この経験を世界に発信する時が来ていると思う。

日本文化は情が強い文化である。もちろん情にもいろいろある。怨念の情はお隣の国々が強く、それがTwitterに沢山流されている。「泥棒にも三分の道理」という諺があるように、理屈をつけようと思えば何でも理屈は立てられるのである。「ことあげ」をしないという美意識が日本にはあるが、国際問題は理を立てて戦わねばならない。

欧米のディベートや中国や韓国の激しい口論、インドの理屈、など、国々は色々な議論の仕方を文化の中に持っている。日本では、議論はややもすると、理屈から離れ、感情の対立になっています。記述による論争ならば、幾分かはこの感情の対立がやわらかくなり、本質に迫る議論が可能になるかもしれない。

梅下村塾の連載も90回に及ぼうとしている。ようやく、（東海新報記事から）という段を設けて、紙上討論の場の準備が出来てきている。気仙地方から国内外にメッセージを発信するためには、何を考え、何を行い、何を、どのように発信すべきか、まず、この議論を（東海新報記事から）の紙上で行いませんか。これへの協力は東海新報社へのお願いでもあります。

（東海新報記事から）

３月６日（水）第２面に「保育講座を開設　シルバー人材センター陸前高田」が掲載されている。生後６カ月から小学３年までの子供の託児を引き受ける、この活動に心から支援を送りたい。願わくば、このシルバー人材センターで、地域の歴史と文化価値の教育も受けられるようにしたいものである。そうすれば、子供達は、自分が生まれ、育っている郷土への思いと心を生みだす、土台となるものを、直接間接に身に受け取ることができると思う。「ケセンきらめ大学」との協力はいかがなのか。

３月10日（日）の毎日新聞の第1面の「余録」に宮城県南三陸町歌津から２４００キロも離れた沖縄県の西表島（いりおもてしま）に流れ着いた郵便ポストの話しが記載されていた。三陸沖では黒潮と親潮が出会う場所である事は昔から知られている。しかし親潮に乗って海流が沖縄県の方まで南下しているとは気に留めていなかった。

島崎藤村の「椰子の実」は遠い南の国から黒潮に乗って愛知県伊良子岬に流れ着いたヤシの実が題材だった。海流運動は南から北への一方向だけでなく、北から南への方向もあるのだ。三陸沖はまさにこの南と北の大きな海流が交り合う場所なのである。

文化は地理条件と深く結びついている。この貴重な地理的条件の中で育まれてきた自然観、歴史観、文化観を世界に発信することを目指さねばならない。「保育講座を開設　シルバー人材センター事業」はその第一歩であると思う。